

中山先生

に

中嶋嶺雄

本紙でも報じられたことと思うが、去る十月十七日の日曜日に鈴木鎮一先生のお祝いとコンサートが松本市音楽文化ホールで行われた。私も東京から駆け付け、門下生代表としてお祝いの言葉を申し上げる光栄に浴したけれど、久しぶりに鈴木先生のお姿に接して、大変感慨深いものがあった。当日は鈴木先生の愛弟子でベルリン芸術大学教授の豊田耕児氏も参加され、才能教育研究会指導者七十名による弦楽合奏の指揮をされた。八十五歳の私の母を含め、松本音楽院当時の父兄の方々も何人か出席し、懐かしい思いでお会いすることができた。「耕ち

ん、耕ちゃん」と私たちが兄事した豊田氏とは、同氏の渡欧後、最近一度電話でお話しただけだったので、たぶん四十年以上の歳月を隔てて再会したことになる。「生命に年なし」と題した鈴木先生の記念講演は、様々な意味で印象深かった。忘れることのできないのは、鈴木先生が講演のなかで繰り返しくりかえして、「最も尊敬する豊田耕児先生を」「皆さん是非とも豊田耕児先生に」と語られたことであつた。第三者が冷静な目で判断すれば、今回の講演は、鈴木先生がその後継者として、万事を豊田氏に託そうと念願されていることの明白かつ一途な意思表明にほかならない。鈴木メソードはいまや全世界に広がっているだけに、いかにお元氣とはいえず、鈴木先生

の後継者問題は、社会的責任としても、また組織論的見地からしても、できるだけ早く方向を定めておくべきであらう。そして豊田氏が最も理想的な後継者であることは、論を待たずに衆目の一致するところである。問題は才能教育研究会が豊田氏を迎え得る体制をいかにして整えてゆくのかにかかっているように思われる。

当目のコンサートでは、四〇人の生徒が難曲チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲第一楽章を斉奏するという鈴木メソードの到達点を披露し、テンポの早いフィオッコのアレグロを二〇〇人以上の生徒が文字どおり一系乱れずに演奏した。これも恒例の曲目で私も



鈴木メソードの演奏家たち

よく弾くバッハの二つのヴァイオリンのための協奏曲第一楽章は、約一五〇人による大合奏であった。いずれも素晴らしいものであり、おそろしく外国の音楽家などが初めて聴いたら、これまでもそうであったように、目を見張って驚嘆するに違いない。

しかし、今回久しぶりにつけてしまいい、その発音のうまさや文字で習って身につけるのとは比ぶべくもないことと、どこか共通しているように思われる。しかし子供たちは一旦外国での生活から離れると、彼等があれほど流暢に喋っていた外国語を、たちまちにしてすっかり忘れてしまふのだ。

私は音文ホールでの子供たちの演奏を聴いていて、たゞ今は二十二年後に今この舞台上で演奏している生徒たちの果たして何人がこれらの曲を弾きつづけているだろうか、と考へざるを得なかった。ここに私が指摘したことは、あるいは鈴木メソードの宿命的な問題点であるのかもしれない。しかし、そうした問題点を自覚するなかでこそ、鈴木メソードと才能教育研究会には、新しい発展があるのではなからうか。

このようなことが脳裏をよぎったためか、今回は才能教育研究会の指導者による、モーツァルトの弦楽四重奏曲二長調(K. 575)を弦楽合奏にアレンジした演奏の方が、豊田氏の指揮に信頼してみずからも演奏家たらんとする奏者たちの心が伝わってきて、私にとってははるかによかつた。

鈴木メソードの指導者は、一様に高い演奏技術と音楽的感性を備えているのだから、様々な形でもっと演奏活動をすべきではなからうか。弦を中心にした本格的な鈴木メソード・オーケストラも、将来ぜひ編成してほしいものである。

鈴木メソードの指導者は、第一ヴァイオリンが奏でる名器ガタニーの豊かな音色をベースに、ハードな練習によって得られた見事な律動感とアンサンブルの良さでポヘミアの抒情を存分に歌い上げた演奏となり、さわやかな感動を与えずにはおかなかつた。

（東京外語大教授「松本市出身」